

## 古文書と花押

中林幸夫

（会員・香川県国分寺町）

各地の歴史資料館等で、古文書を見るたびに、文章の内容よりも墨跡の達筆さに感心する。

昔の人は現代人の我々のように学校教育を受けたわけでもなく、また、日常、新聞や本を読むわけでもないのに、どの文書を見ても、漢字の使い方から字のくずし方まで、現代人をしのぐものばかりで、下手と思えるような文書にお目にかかることがない。

現代人でさえ、漢字がわからず手紙等は、あて字、誤字で、ごまかしの文書を書き、且つ筆書きでなくペン書きの字でさえ、あまり人に見せられないカナクギ流の人が多いのに、何故昔の人は、筆書きで訂正もなく、上手な文書を残しているのだろうか。

辞書もない時代に漢字を多く知っていることに不思議

さを感じる。古文書の多くは、主として役人や武士間のものが多いが、武士の誰れでもが、すら／＼と読めたかも疑問に思える。

それというのは、刀はあっても一般家庭に筆、墨、硯、紙等が常備していた様子がないからである。一般に文字が読めない時代なら、また、字を書く必要もないから当然である。

文書を書くのは、特殊な階層の人たちの社会だけだったのだろう。

農民等は、手紙を出すような離れた家族もないし現代のように役場等への届出書を書くこともなかつたから字が書けなくてもさほど不便はなかつたのではなかろうか。

結婚、葬式等の祝儀袋等は何時頃から始まつたのだろうか。

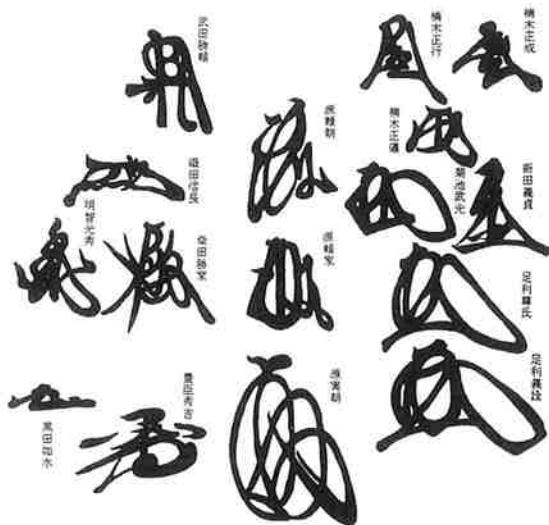
昨今でさえ、生まれてから何百、何千回と書いてきた自分の名前を書くとき躊躇する人が多いのに、昔の人は何故、誰れでもが上手に文書や名前を書いたのだろうか。

私は、代筆する書士がいて読み書きを指導していたと

思えてならない

そこで、文書の最後の署名の下に花押を書いたのでは  
ないだろうか。

「花押」について百科辞典等で調べてみると、花押は、花字、花書、かきはん、そして署名の下に認め印の代わりに書いたとあり、字を書くことが苦手な人は、簡単なりに書いたとある。



武将達の花押

また、品格よく書いてあるものは、それぞれに意味があるとか。

そこで、毎日のように大分県の新聞紙上で見る大友宗鱗の花押は何を意味しているのだろうか。

お酒、お菓子、観光パンフレットと広く使われている宗鱗の花押であるが、意味を聞いたことがない。

其の下に書物を語つてみたが、宗鮎がヨーロッパで  
あつたため、ローマ字の署名等については、解説したも  
のがあるが、花押についての解説を探すことはできな  
かつた。

私は過去、海上保安庁に在職中、第七管区海上保安本部長、渡辺安次氏の下で仕事をしたことがある。氏は太平洋艦隊司令長官、山本五十六元帥の下で先任参謀を務めたほどの武人で、文書等の決裁も、印鑑の押印、色鉛筆のサイン、重要なものは筆書きで花押のようなサインを、と分別していた。

ある時、重要電報を発信するに際して、電話で了解を得たが、本部長のサインが必要となり、過去の文書を取り出して真似て書くことになつたが、署名の内容がわからぬいため、真似ることがむずかしく、署名の内容を解

読しなければならなかつた。

そこで花押のよう<sup>に</sup>筆書きの署名、「上人」を見ていると渡辺安次<sup>リヤス</sup>一をくずして書いてあることがわから、意味がわかると、そつくりの真似ができる。

このことから、宗鱗の花押について、私なりに真似て書いていると「上の人（または人の上）」と書いてあるように思えてきた。

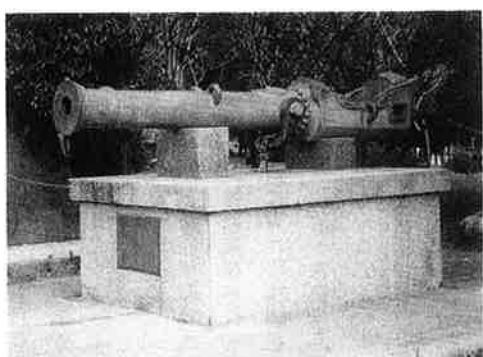


宗鱗の署名と花押

古文書を読むとき、本人の手書きか、代筆かによつては、文章のニューアンスが異なつていると見なければならぬ。

古文書の署名、花押は、もう少し研究する余地があるような気がする。

終戦と同じ陽の下雲の下 幸夫



天正4年ポルトガルから宗鱗に贈られた我が国初の大砲(復製・臼杵城址)

「上の人」と解讀したことは間違いのようにも思うが、宗鱗ならびつたりの意味ではないだろうか。

(本当の意味を知つている方は教えて下さい)

宗鱗の花押で、「上」のところが「人」となつてゐるものがあるが、これは他の人が書いたとも思われる。